

(第1章 エピローグ) それは、さくらが小学 1 年生の時に死んだ大好きな祖母の手紙だった!!。

(祖母の手紙)(表記はしない) さくらへ

せっかくおたからがあるとおもったのに、こんなものしかはいつてなくてごめんね。でもね、ばあちゃんにはさくらにげんじつのきびしさをおしえてあげたいの。このせかいではおもうようにうまくいかず、いやなおもいをするときがな んどもあるんだよ。でも、わすれないで。たとえどんなにつらくても、さくらがきぼうをうしなわなければ、かならずいいことがあるからね。

ばあちゃんは、もうさくらとはいっしょにあそべないけど、いなくなってもかなしまないで。さくらがえがおでいてくれたら、さくらもおとうさんもおかあさんもしあわせになれるから。さくら、きぼうをもっていきなさい。それがばあちゃんとのさいごのやくそくだよ。

(↑手紙終了) 小学 1 年生の時、突然亡くなった祖母。

本来ならその時、最後の宝探しゲームを行い、祖母からのメッセージを受け取るはずだった。

それが 8 年という歳月を経てさくらに届けられたのだった。(少し間がある。) ... さくらの目から、知らず知らずに雫が流れていた。

「..ばあちゃん..」

さくらは祖母の手紙を手に入れた....。

(再度真ん中タンスを調べる) 中には何も入っていなかった。

それでも、目に見えない温もりがある事をさくらを感じていた。

[左の部屋](出口へのドア)(調べる) さくらは、ゆっくりとドアノブに手を近づけていた....。

それは、恐怖を感じているのではない。その先にある希望を手に入れようとする事に勇気をふりしぼっているからである。

ドアノブに手を取り、静かに回した....

(画面が白くなり)(カチャリという音) さくらは、ドアを開け、そのまま後ろを振り向かずに、家の玄関の扉まで走った!!

扉にたどり着き、足を休める事無く、勢いで扉を開けた。

(カチャリという音)(白画面 終了)(青空) ...空は優しい日差しが出ていた。恐怖の対象であるはずの外が今のさくらには 微塵にも感じていなかった。

さくらは顔に当たる暖かい日差しをただ静かに浴びていた.....。

(画面が黒くなる)

たった1つの思い出がさくらに希望を見つけ、闇から救い出してくれた。

(少し間をおく)

おそらく、彼女にはこれからいろんな壁が立ちはだかるはずである。

しかし、今の彼女には決して「あきらめる」という選択肢はないだろう。

絶望の中から希望を見つけたのだから.....

終了)